

厚生労働科学研究費補助金
障害者政策総合研究事業（感覚器障害分野）
分担研究報告書（H30-感覚器-一般-001）

乳幼児の主体性形成過程およびその障害に関する研究

分担研究者：大倉 得史（京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授）

研究要旨

乳幼児の主体性がどのように形成されてくるのかについて、関係発達論の観点から考察した。それを踏まえて、「主体性の育ちの障害」として障害を捉え直し、それに対する支援のあり方について検討した。結果、障害の中心には関係性の障害があること、第一に関係性の障害を緩和させるための支援がなされるべきことが明らかになった。

A．研究目的

障害については、これまでしばしば障害のある能力の改善を目指した「支援」が行われてきた。しかし、そのような「支援」が当事者をかえって苦しめることにつながるケースも散見される。それは一体なぜなのか、その要因を検討するとともに、「能力の障害」とは異なった新たな障害概念を模索し、支援の中心的な指針を見出すことを研究目的とした。

B．研究方法

障害児やその保護者、それを取り巻く社会的状況に関連する主たる文献から、さまざまな事例を収集した。そして、それらに対して関係発達論的な検討を加え、障害をめぐる諸問題の中心に何があるのか、障害をどのように捉えるべきかについて、仮説的モデルを作成するとともに、その仮説的モデルがその他の事例にも適用可能であるかを検討し、必要な修正を加えていくという作業を繰り返した。最終的に、そのような修正が必要なくなり、いわゆる「理論的飽和」に達したと思われる時点で、そのモデルを新たな障害概念として整理し、それに基づく支援のあり方を検討した。

C．研究結果

支援が成功していると思われる事例や、そうではなくかえって当事者を苦しめることになってしまっていると思われる各種の事例の分析から、障害の中心には関係性の障害があることが明らかになった。すなわち、能力の改善が見られることが当事者の生活の質（QOL）の向上に直ちにつながるわけではなく、それ以前に子ども、保護者、支援者の関係性が、子どもを一人の主体として受け止めるようなものになっていることによって、当事者が生きやすくなり、それが諸々の良い循環につながっていくこと、逆にそれが阻害されてしまうと、いくら能力の改善が目指されても当事者が苦しい状況に陥っていく傾向があることが明らかになった。

D．考察

非障害児の育ちの過程は、子どもを育てる者たち（養育者、保育者等）が、子どもとの気持ちの交流を喜び、子どもが独自の興味・関心を発揮していくのを支える中で、自然と子どもが主体的になっていく過程である。一方、障害児の場合、育てる者たちのかかわりが障害の改善を第一に目指すものになりがちで、その結果、子どもの主体性の育ちが阻害され、それが諸々の困難を引き起こしていく傾向がある。それゆえ、障害の中

心にあるのは関係性の障害であるということ
を軸とした、新たな障害概念が必要だと思
われる。

E．結論

障害とは、関係性の障害、能力の障害、
社会の障害が絡み合った一つの「状況」で
あり、その中心にあるのは関係性の障害で
ある。この関係性の障害への支援を中心
にして諸々の支援を組み立てることによ
って、当事者の抱える生きにくさが緩和
されると考えられる。

F．研究発表

1．著書：

大倉得史（2020 予定）：「第 1 章 乳幼児
の主体性（こころ）と社会性を育む支
援」所収 黒田生子ほか編著・監修『聴
覚障がい児・盲ろう児の発達支援テキ
スト（DVD 付き）実践編』 エスコアール

2．論文発表

特になし。

3．学会発表

特になし。

G．知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1．特許取得

特になし。

2．実用新案登録

特になし。

3．その他

特になし。